

研究論文

瀬戸窯業試験場半世紀のあゆみ —試作品等にみるデザインの変遷—

長谷川恵子^{*1}

Half a Century of History at Seto Ceramics Research Institute -Design Evolution as Seen in Prototypes, etc.-

Keiko HASEGAWA^{*1}

Seto Ceramic Research Institute^{*1}

瀬戸窯業試験場では、設立以来の研究試作品等のデザイン業務成果を有効活用するために、デジタルアーカイブを構築してきた。2024年度はそのデータを活用して、開設以来の約半世紀のデザイン業務成果に見られる事例や手法、知見を取りまとめ、産地の展示機関「瀬戸蔵ミュージアム」で、一般に向けてデザイン成果、作品を広く紹介する展示を行い、デザイン関連業務成果全体の「見える化」と周知普及を図った。

1. はじめに

瀬戸窯業試験場は、瀬戸地域窯業界の要望を受け当産地の窯業生産技術の向上と発展を図るために、昭和46年に愛知県瀬戸窯業技術センターとして瀬戸市南山口町に開設し、当地において53年間に及ぶ業務活動の後、2024年4月に、「知の拠点あいち」(豊田市八草町)内に所在するあいち産業科学技術総合センター技術支援部に編入、移転した。

本試験場は、開設以来瀬戸産地の和・洋食器、ノベルティをはじめとする地場陶磁器業界のニーズや課題に対応し、時代に即した研究開発、技術支援を行ってきた。中でも研究業務では、技術開発研究と並び、陶磁器デザイン・製品開発に関する研究、試作を多数実施しており、その数は92テーマ、個別点数にして1574点に上る。

これらの試作品は、研究報告書により製作年度・テーマ、背景、コンセプト、製法、素材等が明らかであり、様々な商品開発に応用可能なデザイン、アイデアが多数あることから、当試験場では2022年の開所50年の節目に「デザイン試作品等の有効活用に関する研究」を3年計画で実施し、作品と関連資料を整理分類するとともに、作品実物と画像、作品の詳細情報、研究報告書等を一括管理し、運用するためのデジタルアーカイブを構築し、試作品等のデザイン資料を閲覧、利用しやすい形に整備した^{1),2)}。本研究では、これらの約半世紀にわたる製品デザインと試作品等を、デジタルアーカイブを活用

して普及、紹介する最初の取り組みとして、瀬戸蔵ミュージアムにおいて「瀬戸窯業試験場半世紀のあゆみ—試作品にみるデザインの変遷—」展を企画、開催した。

2. 実施方法

2.1 体制

瀬戸蔵(瀬戸市蔵所町)内の博物館施設「瀬戸蔵ミュージアム」と連携して実施した。瀬戸蔵ミュージアムは瀬戸の街とやきものを紹介する総合博物館である。瀬戸蔵ミュージアムから、瀬戸蔵20周年記念の企画展として本試験場所蔵試作品等の展覧会開催の申し入れを受け、共同企画により試作品等の公開、展示を行った。開催は本県と瀬戸蔵ミュージアム、(公財)瀬戸市文化振興財団、瀬戸地域窯業技術協議会の共催で実施した。

2.2 展示企画

2023年度までに構築した研究試作品等のデジタルアーカイブに集約した研究試作品等のデザイン関連業務成果に関する情報やデータ、またそれらの情報から考察した試作テーマや内容、デザインの推移状況に関する知見を活用して次の展示企画案を策定した。

- ①瀬戸窯業技術センターの開設から今日に至る約半世紀のデザイン研究を中心に、わが国の社会や経済、生活様式が大きく変化する6つの年代に分けて、各年代の背景と、それに伴う製品デザインの変遷や工夫、特徴を明らかにする。
- ②本試験場のデザイン研究を特徴付ける次のテーマの

*1 技術支援部 瀬戸窯業試験場 製品試験室

スポット展示

- 「三次元 CAD による製品デザインの導入」」
- 「ミレニアム・新世紀、愛・地球博」
- 「再生陶磁器『Re 濑戸』の製品開発」
- 「高齢社会に向けた製品開発」
- 「産地業界に向けたデザイン支援(指導製品)」

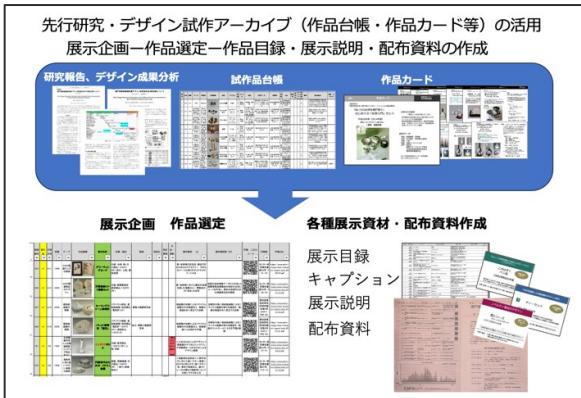


図 1 展示に向けたデジタルアーカイブの活用

展示会名称は、企画内容に合わせて「瀬戸窯業試験場半世紀のあゆみ-試作品にみるデザインの変遷-」とした。

具体的な展示の構成や作品の選定、各種資材、資料の作成については、デジタルアーカイブの台帳データ等を活用し、作業の効率化を図った。展示に向けたデジタルアーカイブデータ等の活用イメージを図 1 に示す。

また、展示作品に関する研究報告書を即時に参照できるように、展示キャプションや作品目録等の配布資料に各展示作品の研究報告書 URL の二次元コードを表示した。

2.3 アンケート調査

これら研究試作品等、デザイン業務の成果の有効活用に向けた運用の参考とするために、展示会期中に来場者を対象に、本展示や展示作品、試験場所蔵試作品等への関心や要望について、次のアンケート調査を実施した。

■調査方法: 質問紙法

■主な調査項目

- ①本展示への興味や関心
- ②展示作品の中で関心のあるもの(複数選択)
- ③所蔵する 1,500 点以上の研究試作品等と関連資料に関する要望(複数選択)
- ④所蔵試作品等の公開、展示に関する要望
- ⑤その他展示や試作品等への意見(自由記述)

3. 結果及び考察

3.1 開催の概要と結果

開催結果は次のとおりである。

2025年1月25日(土)～3月16日(日)、開催日数50日の会期で、入館者数は10,066名であった。本展示に関しては、矢作新報、中日新聞など東版の2紙で報道がなされた。展示会案内を図2、会場風景を図3に示す。

本展示は会期中、陶磁器関連、デザイン業務関係者、他産地公設試担当者等の展示観察、見学が多数あり、各方面の注目を集め、大きな反響があった。

会期中、関連催事として会場において、展示説明会(ギャラリートーク)を2回実施した。各回の開催日と参加人数は、第1回:2月2日(日) 7名、第2回:2月23日(日) 20名。参加者の展示に対する反応は良



図 2 展示会案内



図 3 展示会場風

好であり、本試験場試作品等成果品やデザイン業務への理解、関心を高めることができた。

3.2 展示内容

当試験場の研究試作品は、テーマ、内容、種類が豊富で多様性に富んでおり、それらの製品企画やデザインには陶磁器製品の可能性を広げるユニークな発想や、その時々の産地や社会の課題や生活者のニーズに対応する様々な創意工夫が多数見られる。展示においては、主に開設から半世紀にわたる研究試作とデザインの変遷について、次のとおり、年代ごとに時代背景、年代の特徴と代表的な試作を紹介した。

(1) 1970 年代前半の試作

高度経済成長から安定成長期、公害や粘土資源枯渇への対応が大きな課題であった。未利用資源「水野粘土」の資源化や硅砂副産物のキラなどの廃棄物の活用研究の実用化試験としての試作品。

(2) 1970 年代後半から 80 年代前半の試作

輸出大国、経済大国へと成長。内外の陶磁器需要に向けた生産拡大、海外中進国、国内他産地との競合の中、ライフスタイルや消費ニーズの多様化に対応した製品デザインや、輸出製品の高品質化、イングレーズ、液体顔料による加飾の高度化、産地の伝統的素材や技術の活用による試作品。

(3) 1986 年から 1991 年: バブル期の試作

日米貿易摩擦、1985 年のプラザ合意により急激な円高、国内はバブル経済に移行。市場の成熟、海外高級品等の流入により、世の中にモノが溢れた時代であり、価値観の多様化、個性化により消費行動が大きく変化した。デザイン手法も、従来のアイテム選定、フォルム、加飾のデザインといった定型を脱し、より新規性のある製品開発手法を模索した。その一例として、金属や木材など他素材を組み合わせた遊び心や意外性のある試作品。

(4) 1990 年代: バブル経済崩壊以降の試作

バブル期を経て、さらに多様化、個性化する消費

ニーズや市場に対応し、マイホームブーム、ガーデニング、オートキャンプなどのブームに対応した製品開発、拡大する外食産業向け飲食器の試作開発、輸出不振が深刻化する輸出ノベルティの内需転換を支援する国内向けノベルティのデザイン、高齢社会に向けた食器開発。

(5) 2000 年代の試作

パソコンやインターネット、EC サイト、スマホの普及、国際的に環境意識の高まりがみられた。21 世紀到来に向けた慶祝グッズの開発、日本国際博覧会に向けた製品開発支援、また、「長寿高齢社会」「エコ、リサイクル・サステナブル」などの社会課題に対応した製品開発。

(6) 2010 年以降の試作

組織変更の影響から、試作数が減少する中、県内地域資源や他分野の販売チャンネルをもつ外部団体との連携による販路開拓と商品化など、低迷する産地に対し、より実効性のある支援を目指した。潜在ニーズを掘り起こし、企画段階からの専門家、産地メーカーと連携した商品化事例。

また暗所で発光する蓄光セラミックスや名古屋輸出陶磁器の希少加飾技法凸盛りなど、高い加飾効果、希少性のある加飾技法による発信力のある製品試作。

3.3 展示作品等に関するアンケート調査

会期中に来場者を対象に行ったアンケート調査結果の概要は次のとおりである。

アンケート回答数は 96 件。回答者の属性は学生 19%、窯業・陶磁器関係と会社員が各 13%、学校・教育関係 10%、官公庁 8%、自営業 3% と幅広い。

アンケートの結果、本展示への関心については回答者の 88%が関心ありとし、興味関心の高さが確認できた。(図 4)

展示作品の中で、「良いと思う、関心のある作品」については 57 件の回答があり、中で特に多数の支持(得票 12~7 ポイント)を集めた作品を図 7 に示す。以下は図 7 中の①~⑩の作品の名称と製作年度である。

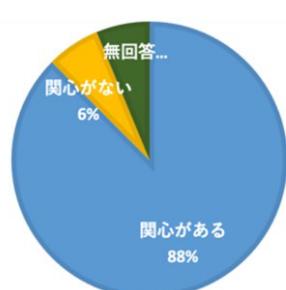


図 4 本展示への興味や関心

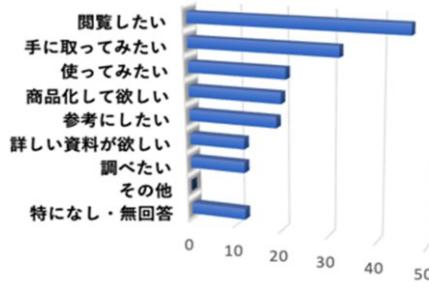


図 5 作品等と関連資料に関する要望

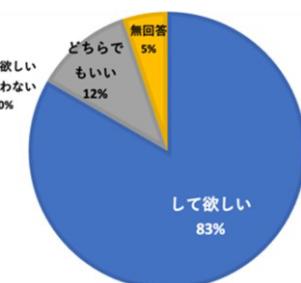


図 6 試作品等の展示公開



図 7 展示作品の中で良いと思う、関心のある作品(上位)

①蓄光オーナメント(2017)、②ガラス盛りランプベース(2020)、③イングレーズ蓋物(1977)、④鳥シリーズ花瓶とキャンドルスタンド(1979)、⑤ランプスタンド「ニット帽」(1988)、⑥栗形 S&P(1992)、⑦グリーティングカー(1999)、⑧ガラスペーパーウェイト(2000)、⑨時計「カーリングストーン」、⑩瀬戸染付の凸盛りアクセサリー(1988)、イングレーズ蓋物(1977)。

この結果からは、幅広い年代にわたって、多様なテーマ、内容、種類の作品が、デザイン、企画、発想、素材感等、様々な視点から評価されていることが窺われ、出品作品をはじめとしたデザイン試作品のデザインや発想には、今日のものづくりにおいても有用なものが多数あることが裏付けられた。そしてまた、その具体的な作品事例を確認することができた。

当試験場の成果作品等に関する要望については、「作品の閲覧」46%、「手に取って触りたい」32%、「使ってみたい」21%、「参考として利用」、「商品化」は各 19%、「関連資料が欲しい」、「詳しく調べたい」が各 12%であり、作品実物の公開、閲覧をはじめ試作品、関連資料等に関する具体的な要望が多数示された(図 5)。

研究試作品等の今後の展示・公開、については、83%が希望しており、本展示による試作品等のデザイン成果に対する関心の高まりを確認することができた(図 6)。

これらの結果は、今後のデジタルアーカイブ運用とデザイン成果作品等の公開、活用に向けての有用な知見となった。

4. 結び

瀬戸窯業試験場が所蔵するデザイン研究試作品等の有効活用に向けて、これまでに構築したデザイン試作品等のデジタルアーカイブに集約した開所以来のデザイン試作品等 1,570 点 426 件の詳細データを活用して「瀬戸窯業試験場半世紀のあゆみ—試作品にみるデザインの変遷—」展を瀬戸蔵ミュージアムと共に開催した。本展示は開所以来の研究試作品をはじめとしたデザイン成果品を精選し、時代ごとのデザインの変遷と特徴を一般に紹介するものであり、産地の陶磁器関連事業者、デザイン関係者をはじめ、各方面の注目を集め、大きな反響があった。

会場で実施したアンケート結果からは、本試験場の試作品や関連資料への関心の高さ、保存と利活用への期待と具体的な要望を確認することができた。

本展示の周知、普及効果は非常に高く、今後のデジタルアーカイブの活用と研究試作品の公開、活用に向けての大きな成果となった。

謝辞

本研究における展示を「瀬戸蔵 20 周年記念事業」の一環と位置付け、展示企画、開催事務、来場者へのアンケート調査、関連催事ギャラリートークの開催などに多大なご尽力をいただいた瀬戸蔵ミュージアムと同学芸員岩井理氏に厚くお礼申し上げます。

文献

- 1) 長谷川恵子,朝野陽子: あいち産業科学技術総合センター研究報告, 11(2022)
- 2) 長谷川恵子: あいち産業科学技術総合センター研究報告, 12(2023)